

a 学校教育目標	地域に愛着と誇りを抱き、 夢の実現に向け自ら学びを求め、行動できる子どもの育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 地域・保護者の信頼を得、心から「西小で学んで良かった」「通わせて良かった」と誇りに思われる学校
----------	--	----------------------	--

評価計画					自己評価					改善方策	学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			m コメント
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ	
働き方改革の推進	新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制を構築する。	「公立学校教育職員の業務量の適切な管理その他教育職員の服務を監督する教育委員会が教育職員の健康及び福祉の確保を図るために講ずべき措置に関する指針」に基づいた取組の構築と推進	・教職員の時間管理能力の向上 ・学校経営会議や部会を通して業務の精選及び学校行事等の見直しや改善	・1カ月の在校時間の総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が45時間を超えないようにする。 ・1年間の在校時間が総時間から条例等で定められた勤務時間の総時間を減じた時間が360時間を超えないようにする。	100%	84.6% (67.1)	.88.5% (73.2)	88.5% (73.2)	B	○各月45時間を超えない達成率 ※()内の数字は令和4年度 4月73.0%(36.0) 5月80.7%(64.0) 6月65.3%(32.0) 7月100.0%(88.0) 8月100.0%(100) 9月92.3%(56.0) 10月88%(92.0) 11月100%(92.0) 12月88%(68.0) 1月100%(100)	○学年部での業務内容の標準化の見直し ・役割分担の明確化 ・既存のデータの活用 ○積極的生徒指導の推進 ・自己決定の場の設定 ・共感的人間関係の構築 ・自己肯定感の育成 ○不登校児童の減少 ・綿密な連携と外部機関における居場所づくり ○会議の精選と周知方法の改善 ・ICTの効果的活用 ・スケジュール管理の徹底	6/6人		・業務を効率的に進められる仕組みづくりができてい る。 ・学校全体でよく改善に努められてい る。改善策を継続してほし い。 ・時短と現実の差は結局は人材でしか埋められないと思 う。 ・不登校児童の中にヤングケアラーとしての生活実態は如何なりや。 ・不登校児童の状態に応じ て外部関係機関の利用も選 択肢の一つ。
確かな学力の育成	主体的に学び合う児童を育成し、学力の向上を図る。 「かしこく」自ら学ぶ子ども	「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業を通して、本校で育成を目指す資質・能力をもった、自ら学ぶ児童の育成を図る。	本校の研究主題に全員で取り組み、仮説の検証のために計画的な実践研究を行い、研究主題に迫る授業がどこまでできたかを互いに検証する。	『主体的な学び』に関する児童アンケート肯定的評価 ・論理的思考力に関するアンケート	85%以上	93.0%	93.0%	109.4%	A	・論理的思考力に関するアンケートの結果、とても39.6%、まあまあ32.6%となり、根拠に基づいて発言することを意識すること にさせる。 ・中学年以上は、根拠を複数挙げる発言例を示し、情報を結び付けて考えることを指導する。また、前学年を通して、三角ロジック(根拠、理由付け、主張の三点セット)での発表を意識づける。 ・条件に沿ったふり返り活動を習慣化させる。	・発言の際、根拠を示して説明することを意識づける。 ・自分の経験や知識を想起させ、具体的に想像できるようにさせる。 ・中学年以上は、根拠を複数挙げる発言例を示し、情報を結び付けて考えることを指導する。また、前学年を通して、三角ロジック(根拠、理由付け、主張の三点セット)での発表を意識づける。 ・条件に沿って書くことを日常の授業やふり返りにも取り入れる。 ・「精査・解釈」の場面で想像したことを書く場面を設定し、表現させる。 ・単元末テストを実施する前に、学習内容が理解できているかを復習する時間を学年で設定する。 ・教科書教材以外の読解プリントに取り組み、様々な種類の文章の読解に慣れさせる。 ・クロームブック等を活用した個別最適型の学習を進めていく。 ・ドリルタイムには、管理職や専科が各学年や学級に順に入り、指導補助を行う。 ・5年生では、ドリルタイムを活用し、低学力層の算数の学力補充を重点的に行うとともに、希望者には週二回放課後補充を行う。	6/6人		・研究主題、手法が全クラスに浸透しており、授業改善の結果が子供たちの学びの姿に表れている。 ・書くことで論理性も向上すると思う。基本的な事は繰り返しやる事が地味でも最速の方法だと思う。 ・学習の定着化は繰り返しにより自信を高める。様々な種類の文章に当たったことは大切だが、ゆとりを持って量より質が大切。 ・発表等で三角ロジックや根拠を示した説明を意識づけるためには、教職員がその発表スタイルを提示することが必要。 ・クロームブックの使用常態化により書くことに対して躓く点も出てきているのではないかと思慮する。
豊かな心の育成	様々な人や事象とのかかわりを通して、社会性や豊かな人間性を培う。 「なかよく」心豊かな子ども	合唱と読書活動等の充実と奉仕活動等を通して、豊かな感性・豊かな心の育成を図る。 特色ある地域の学習材や人材の活用と交流を通して、地域を想う心情を育てるとともに、社会貢献意識と規範意識の向上を図る。	学年(学級)ごとに児童の実態に応じた合唱に取り組み、仲間意識や表現力の育成を図る。また日常的な音声表現活動(詩や短歌・俳句等の音読・暗唱)を通して、自己表現に自信を持たせる。	『自らへの自信』に関する児童アンケート肯定的評価	80%以上	76.4%	92.1%	95%	B	・「ぜんぜんあてはまらない」と答えた児童が全校で5.8%(28人)いる。また学年が上がるにつれ、否定的評価が高くなっている。 ・道徳や学活、帰りの会を中心に、達成感・充実感をもたせる活動に全体で取り組み、自己肯定感が低い児童へ個別の支援ができていなかった。	・今後も、達成感・充実感を持たせるような活動を仕組んでいく必要がある。 ・引き続き「今日のキラリ」のような全体の雰囲気や個人の自己肯定感を高める活動を行っていく。 ・委員会やクラブ活動などで高学年が活躍する場を作り、高学年の肯定的評価が高くなる取組を、各学年と仕組んでいく。	6/6人		・シラバスが確立された系統的なふるさと学習は、郷土愛や社会貢献意識を高めている。 ・自己肯定感が育まれるのは「家庭教育」が基本だと思う。家庭へのアプローチが必要と思う。
健やかな体の育成	自らの体力と健康を向上させ、自己管理能力の育成を図る。 「たくましく」健やかな子ども	組織的・計画的実施により児童の体力の向上を図る。 食教育や保健・安全教育の推進により、自己管理能力の育成を図る。	児童アンケートや体力テストの調査の結果分析をもとに、課題克服のための取組(校内研修、外部講師による児童への直接指導、小中連携等)を充実させ、教職員の意識向上と児童の体力向上を図る。	①体力テスト全国及び県平均値以上達成率 ②児童アンケートの外遊びをすることへの肯定的評価	①70%以上 ②80%以上	①% ②81%	①67% ②82%	①98% ②101%	①B ②A	①男子は9種目のうち5種目、女子は9種目のうち7種目平均を上回った。しかし、シャトルランと立ち幅跳びはどちらも平均を下回った。ほぼ、目標を達成することができた。昨年は改善されたため、児童を中心とした外遊びの奨励の取り組みを引き続き行っていく必要がある。 ②外遊びの肯定的評価は82%であった。(前年比4%↑) 否定的な評価の児童が18%であり、前年度に比べ4%の改善ができ、目標値を達成することができた。少しずつ、遊び方やルールを守って遊ぶ児童が増えてきているがまだ取り組みを継続する必要がある。	・友達を肯定的に評価するような「今日のキラリ」のようなものに引き続き取り組んでいく。 ・ふるさと学習や感謝の会等で児童が活躍する場を増やし、役割が果たせる活動を各学年と仕組んでいく。 よりよい学校づくりに関する児童の考えを児童会活動を通して学校に反映させ、児童に達成感・充実感を持たせる。	5/6人		・様々な場面で子供たちは体を動かす楽しさを実感している。 ・学校側の課題克服は一朝一夕にはできないと理解する。慌てず急がずのスタンスで90%でも良い。 ・朝も休憩時間も元気な声が聞こえ、縄跳び大会も良いムードだった。 ・先生方の情報共有、連携により取り組みの成果が出ている。今後も食事の様子や残菜等からも児童の背景を見てほしい。 ・給食に関しても家庭との連携が必要。 ・体力向上を図る手段の一つとして、次年度は安全に配慮し「学びの森」の復活を望む。
					75%以上	78.0%	80.0%	106%	A	・給食を時間内に食べきっているのは80%であった(前年比10%)。前年度に比べ10%の改善ができ、目標値を達成することができた。しかし、各学年の様子を見ると食器の準備が遅かったり、片づけの時に食べ残しがあったりした。 ・アレルギー対応が必要な児童への対応の仕方について、教職員全員が連携を取りながらより適切に対応できるように改善策を作成し、教職員間で共有することができた。	・準備を早く終わらせるための配り方や時間の使い方の指導を継続して行っていく。また、片付けるときのポイントや食べ残しのチェックを教員で行い、肯定的な声掛けを行っていく。 ・アレルギー対応マニュアルをはじめ児童に関わる大切な事柄は、年度当初だけでなく、定期的に確認・共有していく。	6/6人		